

Title	サン、シモン派の社会改造哲学及び連帯思想(五・完)
Author(s)	米田, 庄太郎
Citation	経済論叢 (1923), 17(4): 474-493
Issue Date	1923-10-01
URL	<a href="https://doi.org/10.14989/128081">https://doi.org/10.14989/128081</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

會學濟經學大國帝都京

# 叢論經濟

號四第 卷七十第

行發日一月十年二十正大

## 論 叢

獨身概論 . . . . . 法學博士 財部 靜治

モン・シの社會改造哲學及び連帶思想 . . . . . 文學博士 米田庄太郎

植民地の經濟政策に就きて . . . . . 法學博士 山本美越乃

海運に於ける競争と獨占との分界 . . . . . 法學士 小島昌太郎

## 時 論

震災經濟觀 . . . . . 法學博士 河田 嗣郎

時局緊急の經濟關係諸勅令 . . . . . 法學博士 神戸 正雄

## 說 苑

安政の震災と救濟策 . . . . . 法學士 本庄榮治郎

勞働生産力と勞賃 . . . . . 經濟學士 森 耕二郎

## 雜 錄

原始的土地所有權の一例 . . . . . 法學博士 河 上 肇

兌換券と物價指數との關係 . . . . . 經濟學士 蜷川 虎三

戰後獨逸の大学生數 . . . . . 經濟學士 岡崎 文規

## サン、シモン派の社會改造哲學及び連帶思想 (五完)

米 田 庄 太 郎

### 七 哲學的及び宗教的思索の復活

メニルモンタン修道院解散後、殊に千八百四十年頃より千八百五十一年頃までは、サン、シモン派の人々は上に述べ來りし如く、専ら政治問題に力を注ぎ、殊に生活の途を求めむる必要に迫まれて、自から哲學及び宗教の問題に注意を怠つて居たが、第二帝國の建設後彼等は一般に社會的地位を得、生活の困難を脱したから、再び以前の如く哲學的及び宗教的思索に熱中するに至つた。而して神及び不滅の問題は再び盛んに論究されて來たが、此の際吾人は彼等の間に二つの傾向の發現したことを見るのである。一は云ふまでもなくアンフアンタンを中心として現はれた傾向である。二は夫れとは種々異なる色彩を有する傾向にして、アンフアンタンから獨立し、ルモンニエル及びブロチエル (Lemonnier et Brohier) を中心とするものである。此處には只アンフアンタンを中心とする傾向を考察するだけに止める。

アンフアンタンはバリ、リオン鐵道會社の重役として、千八百五十六年巴里に居住を定めて以

來物質的に甚だ幸福なる生活を送つて居た。併し彼は夫れで決して満足せず、矢張り自分はサン、シモン派の教父であると確信して、同派の立場から時事問題をも熱心に論議したが、殊に哲學的及び宗教的思索に耽つた。されど夫れは新しき眞理を發見すると云ふが爲めではなく、千八百三十一年以來彼の常に信奉し來れる教義を、益々明確に定立せんが爲めであつた。千八百五十八年の彼の覺書には、「二十七年經過したが、余は毫も變更する點を見ない」と記されて居る。併し此の頃から彼の死去するまでに、彼が殊に重要視したのは、靈と肉との平等を汎神教によりて、即ち普遍的な生活に於ける此等二要素の和合によりて、辯護的に論證することであつた。而して彼は加特利教會をして彼の教義を受け入れさせ、信仰と平和とを社會に齎らす爲めに、同教會を利用せんとする願望及び希望を、常に抱いて居たのである。

千八百五十八年にアンフアンタンの公にせる「人間學」(la Science de l'homme)は、右の主旨を論述したものであるが、此處に其根本思想を簡單に述べて置く。今同書に於てアンフアンタンの論述する處によると、世人は人間に於て只腦髓のみを尊重するが、併し夫れは正當でない。人身の本質的器官は實際に於て二つあるので、一は云ふまでもなく腦髓であるが、二は生殖器官である。而して兩者の間に之を結合する神經系統があるので、是れ感情が觀念と事實とを結合するが如きものである。此等の二大器官の各々は二重性を有する。是れ宇宙間何處に於ても、總て事

物は對して存立するからである。腦髓器官は男性である大腦と、女性である小腦とを有し、生殖器官は均しく男性的なものと女性的なものとの二種を有する。而して生殖器官を賤む可き嫌ふ可きものとして考へるのは、大なる謬見である。生殖器官及び吾人の總てに生命を與へる神聖なる愛が、動物的器官として、或は禽獸的慾情として考へられるならば、貞操も、男女間の禮儀も、優美温雅の情も世に存しなくなるであらう。而して靈は肉の如く墮落し得るので、腦髓は生殖器官の如く時としては、恐る可き不徳の満足に使用される。肉と靈とから成立するものとして人間は、其の個性をなす内部的方によりて兩者を結合する。人間はコシデイラクの信せし如く、只外部的感覺を受け入れるだけのものではなく、夫れ自身によりて活動、力、愛を産出するものである。人間の自我は非我に對立し、小宇宙は大宇宙に對立し、而して兩者は普遍的な生活に於て交通し、融合する。靈と肉或は精神と物質との合致は、即ち道德に於て成就される科學と産業との合致である。是れカバニス、チュルゴ及びコンドルセの豫見せるもの、其等の人々は一新世界の先覺者にして、而してサン、シモンとアンファンタン自身とは、其の新世界に生れた最初の間人である。「人間學」に於けるアンファンタンの根本思想は、右に述べしが如きものにして、興味あるもの、味ふ可きもの、決して忽諸に附せらる可きものではないのであるが、併し彼は之を詳しく展開するに當つて、デリケートな問題をあまりに露骨な言葉で論じたり、又小供らしき考へを混じたり

なごしたが爲めに、諸方面より盛んに非難され嘲弄されたのである。殊に彼は加特利教會の僧侶から非難を受けた。然るにさきに述べし如く、彼は加特利教會をして彼の教義を受け入れさせることを、大に重要視したのであるから、特に同教會の僧侶の批評及び非難に注意し、之れに答へて以て彼等の覺醒を促さんと努力した。かくて加特利教會の教父フェリクスが、ノトルダムの大會堂に於ける説教に於て、禁慾主義を讚美し、肉の復活を非難するや、アンファンタンは直ちに之れに答へて大に論辯に努めた。彼の論ずる處にすれば、今日まで基督の肉は、屍を以て被はれた戰場に於て、貧民の密集する長屋に於て、労働者が獸類の如くに虐使される工場に於て、實に殘酷に侮辱されて來たので、又今日も侮辱されて居るのである。されば富者に禁慾主義を説くは有益な事であるが、併し貧者に之を説くは愚であり、殘忍である。只黒バンだけで漸く生命をつなぐ貧民に、肉を節約せよとは何の事か。中世紀の加特利教は大會堂を建設し、壯嚴なる儀式を設定し、産業を發達させた。是れ今日加特利教會の従ふ可き實例である。かの一方に於ては神秘主義他方に於てはゼジュイト派を産める純靈的傳説は、よろしく斷然放棄する可きである。今日教會の甚だ無力なるは、是れつまり新しき世界を理解せず、禁慾主義を固守して居るからである。加特利教會の僧侶は殆んど全く民衆の中から出た人であるから、彼等にして少しく自から反省すれば、今日の民衆の欲求をよく理解するに毫も困難はない筈である。而して其の際には加特利教會

は再び偉大なる社會的勢力となるであらう。

アンフタンタンは又、彼の汎神教に對する加特利教僧侶の批評に答へる爲めにも、大に力を注いだ。此處に著名なる當時の學僧グラトリの批評に對する彼の答辯の要點を極簡単に述べて置くが、彼の考へる處によれば、無から世界を創造した一の人格的神が存在すると云ふ基督教的信仰は、人間に對しても亦宇宙に對しても輕蔑の念を起させ、而して只神に對する愛のみを重要視するに至らしめた。夫れよりして教會は、科學、産業及び藝術を賤しむ著しき傾向を有するに至つたと思はれるが、是れ實に教會と現代社會との分離を生せる根本原因である。而して此の分離は人類の爲めに非常に悲しむ可きものにして、今日の一切の害惡は其處に淵源を發して居るのである。されば加特利教會の僧侶等はよく此の點を反省して、人格神の信仰を棄て、汎神教の思想を以て教會の根本的更生を圖る可きである。

アンフアンタンは加特利教會に對しては、右に述べし如くに其の更生を促がすと同時に、又反教會主義者に對して加特利教會の功德を説き、同教會を破壊せんとするは、一層大なる害惡を生ずるものなるを覺らない謬見であると論じて居る。彼の考へる處によれば、加特利教は實に世界主義、平和主義に基いて立てられたるもの、而して之を創立せるは、徵兵制度を知らない、其の信徒の間には階級の差別や更に人種の差別さへも認めない、職務の世襲も財産の世襲も否な私有財産制さ

へも行なはうとはしない、死刑を許さない、而して幼児を高め、惱めるものを慰め、病めるものを恤む、死に行くものに望を與へるに於て、今日までに何人よりも無比に勝れたる、一大工であるのである。加特利教會を破壊することは理性の女神を祭ることになるのであらう。又新宗教を立てることは、既に存在する無数の宗派に更に一宗派を加へることになるであらう。何れも無益である、否な有害である。今日最も肝要なるは、實に加特利教會を更生させることである。

アンフアタンは最後に「永久生命」(La Vie Eternelle)と題する一書を著はしたが、夫れは靈魂不滅に關するサン、シモン派の教義を詳しく講述したるものである。此處に其の大意を述べて置くが、夫れ基督教の信者は個人に對する未來の生命を信するが、サン、シモン派の信者は永久の生命即ち其の各部分が個人へ傳はり、普遍的生命の部分をなす處の過現未の生命を信するのである。ある處のものはありし處のもの、概要、及びあるであらう處のもの、芽を包有する。砂の一粒さへも絶滅するものでない。如何にして人間は絶無に歸するであらうか。過古の諸世代は吾人に生動し、吾人は將來の諸世代を吾人の中に藏有する。是れは只生理的現象に就て云ひ得られるだけでなく、師弟間に於ける觀念及び感情の傳達に就ても云ひ得られる。個人的不滅の教は利己心を産む。然るに人間は利己的であると同じく、又献身的存在である。人間は隣人に献身し、科學に献身し、名譽に献身する。幼兒はまだ生命を有しない、併し己を圍繞する人々から、之を受ける。



老人は最早生命を有しない、彼は他の人々に之を與へたのである。健實なる人間は忽然新生命を獲得し得る。アンフンタン自身は其の好適例である。彼は第十八世紀の弟子として、彼の體内にはヴォルテア、ルーソウ、ヘルベテユス、及びオルバク等が生存して居た。然るに一朝サン、シモンが入り込んだ、而して彼に伴なはれてモーゼ、ソクラテス、プラトン、グレゴア七世、マOMET、ルーテル等が續々入り込んだのである。ババン及びステファンソンの如き大發明家や、アレキサンドル、セザー及びナポレオン等の如き大征服者は決して死なない。是れ彼等の事業が永續し、彼等の人格性は吾人に靈感を與へ、吾人を生動させるからである。吾人をして死人の偶像的崇拜を棄て、彼等の生命を繼承せる生人に於て、彼等を讃仰せしめよ。又彼等を全自我と其の非我との生きた交通、全有限者と之を圍む無限的自然との生きた交通である處の神に於て、讃仰せしめよ。

此の教義は人間が暴君となるを許さない。是れ此の教義は回教人をも支那人をも黒人をも、普遍的生命に於て基督敎信者と交通させるからである。此の教義は又人間に其の本質の尊嚴を教へることによつて、人間をして奴隸の境遇に自らが歸らぬことを許さない。空間及び時間の外に存する靈魂の存在は、最早理智の發達せる人々には信せられない。吾人の地球が益々勞働及び事業によりて飾られるほど、人間は遁げ入るべき天の世界を求めない。

汎神教は罰や祈禱を無用ならしめるか。決してそうでない。只之を變形させるだけである。總ての人間は神の生命に與り、正義及び力殊に進歩を憧憬する。而して完成可能性に於て進歩する此の能力が、即ち將來の宗教の基礎であるのである。罪とは此の進歩的運動を忘れることにして、罰とは生類の位階的秩序に於て其の位階を失ふことである。而して祈禱は最早自然の法則に於ける變化を求め、呪物教的希求ではなくなるであらう。夫れは存在する總てに對する恩寵の行爲にして、事物の進歩を早める爲めに、神の祐助を得んとする願望を伴ふ可きである。人間の連帶は總ての人々に、各人の過失及び功績の一部分を賦與するものであるから、佛國人の各々は夫れ自身の中に、其の母國の不徳を藏有して、夫れが爲めに日々罰せられ居るが、併し又夫れ自身の中に、母國の徳をも藏有して居るので、夫れに對して神は吾々佛國人を恵み、保護し、光榮ある又神聖なる報酬を、絶へず吾々佛國人に與へて居る。而して此の連帶説は死刑、戦争、永久罰の信仰等を消滅させるのである。今や犯罪は大に減少しつゝある。又其の原因として只貧困と無智との二者が残つて居るだけである。而して此の二者に對しては社會に責任がある。吾人をして二者の消滅に努力せしめよ、一切の革命は終るであらう。而して偉人の報酬は彼等の受ける永久生命、彼等の事業の成功、神に對する彼等の愛にあるのである。

アンフアンタンの最後の著作「永久生命」の要旨は、以上述べしが如きものである。同書は千

八百六十一年に公にされたのであるが、其の後彼は更に「新百科全書」の編纂や、又彼が「精神的銀行」(Le Crédit intellectuel)を稱するもの、設立を企だてた。併し夫れは成功しなかつたので、彼は大に失望した、而して千八百六十四年八月三十一日遂に死去したのである。

アンフアンタンの死去によりてサン、シモン派は其の中心を失なふたが、併し直ちには消滅しなかつた。而してヅユヴェリエはアンフアンタンの志を繼いで、「新百科全書」の編纂や、「社會進歩館」(Institut de Progrès Social)の設立に大に力を盡くした。(但し何れも成功しなかつた)。又デイシユタルやバルロはサン、シモン説によりて基督教を改造することに力を注いだ。殊にバルロの著「基督」(Barrault, Le Christ, 1865.)は、或意味にてはアンフアンタンの「永久生命」よりも勝れて居るので、サン、シモン派の最後の教義書であるとも云はれて居る。尙ほ其の他の著名なるサン、シモン派の人々、例へばオルステン、グルールモンニエ、ローラン、ヴヴァンサール、デイシユタル等もサン、シモン派の事業に努力し、死するまで同派の信仰を固守して居たが、併し彼等の死と共にサン、シモン派は全く消滅したのである。

## 八 一般的評價

余は以上の諸節に於て千八百一十五年、サン、シモンの死後直ちに設立されたサン、シモン派

が千八百七十年頃に至つて全く消滅するに至るまでに、其の思想に於て如何なる發達をなせるかを、歴史的に稍々詳しく述べたのであるが、是れより同派の思想が其の後の社會思想の發達に及ぼせる影響を一般的に評價し、殊に社會連帶思想の發達に於ける同派の思想の意義を論究して見たいと思ふ。

普通には、サン、シモン派の思想は空想的なものにして、同時代に於ても亦其の後の時代に於ても、格別影響する處なきもの、如く考へられて居たが、併し詳しく研究して見ると、決してそうでないので、種々の方面に於て甚だ重大なる影響を及ぼして居ることが發見されたのである。近來公平に同派の思想及び運動を研究せる人々は、種々の方面に於ける同派の影響の重要なを指摘して居る。此處には其等の諸方面に亘りて一々詳しく述べる暇はないので、先づ社會思想や社會運動以外の方面に於て、同派の及ぼせる影響を簡單に指摘し、夫より主として社會思想の方面に於ける影響に就て、稍々詳しく述べることとする。

今サン、シモン派の人々は、其の社會思想の立場から實際生活に於て活動し、現代佛國の經濟的發達の上に、殊に鐵道及び銀行の發達や、企業の集中及び國家的企業の發達の上に、重大なる影響を及ぼしたので、其等の點に就ては上に同派の實際的活動を述べし際に、少しく指示して置いたが、デード氏の好著「經濟思想史」中にも其等の點に就て特に論述されて居る。(Gide et

Rist, Histoire des Doctrines Economiques. Livre II. Chapitre II. § 3. 參考) 又政治思想の發達に於ける同派の影響に就ては、ミシエル氏の好著「國家の觀念」(Henry Michel, L'Idée de l'Etat. Livre Deuxième. Chap. I.) 中に論述されて居る。而して同派の藝術思想、即ち古典藝術說や、藝術の爲めの藝術の思想を極力排斥し、人生の爲め或は社會の爲めの藝術を高調する思想が現代佛國文藝の上に及ぼせる影響に就ては、ウエル氏の好著「サン・シモン派」(Georges Weil, L'Ecole Saint-Simonienne. Chapitre XI.) の中に指示されて居る。

却説サン、シモン派の思想が、現代社會思想の發達に及ぼせる一般的影響に就ては、既にカール、グリユンは左の如く述べて居る。「サンシモン説は恰かも人が打ち破つて其の殻を棄てたが、其の中の幾多の種が至る處に、夫れから夫れへと發芽し、生育する一の種莢の如きものである」。(Lorenz von Stein, Geschichte der Sozialen Bewegung. Zweiter Band. S. 230. 引用) 又エンゲルスも「吾人はサン、シモンに於て、後の社會主義者の嚴密に經濟的でない殆んど總ての思想の萌芽が包有されて居る處の、天才的に博大なる見地を發見するをすれば云々」(Friedrich Engels, Herrn Eugen Dührings Umwälzung der Wissenschaft. Achte Auflage. S. 277) といふて居る。但し此處にエンゲルスの「嚴密に經濟的でない思想」と云ふて居るのは、特にマールクスの餘剩價值説を意味して居るのである。而してサン、シモン及びサン、シモン派の思想に於ては、エンゲル

ヌの云ふ如く確かに餘剩價值説の萌芽は見出されないが、併し餘剩價值説は社會主義の上から見るもさほどに重要なものとは思はれない。とにかくカール、グリュンやエンゲルスの如き早代の獨逸社會主義者も、サン、シモン及びサン、シモン派の思想に就て右の如くに述べて居ることを見て、現代社會主義の發達に於ける其の影響の重大なることが察知されると思ふ。

尙ほ余は更に先づロレンツ、フオン、シュタインが千八百五十年、アンフアンタンや其他のサン、シモン派の有力なる人々が、在世中に公にせる「佛國に於ける社會運動の歴史」(上に原名を挙げたる著書)に於て、既にサン、シモン派の思想に如何なる意義を認めて居たかを述べ、次に又チードが其の「經濟思想史」(原名は上に挙げてある)中に之れに認めた意義を述べて、以て今日の佛國の學者のみならず、外國の學者も公平に學問的に考察せる人は、早くからサン、シモン及びサン、シモン派の思想を如何に重要視したかを示し、夫れより特に同派に於ける社會連帶思想の發達に就て、少しく考察したいと思ふ。

ロレンツ、フオン、シュタインが右の著作の第二卷中に、サン、シモン派の意義に就て述べて居ることは、同書が千八百五十年に公にされたものであると云ふことによりて、殊に吾人の興味を大ならしめるのである。而してシュタインの述べて居ることは左の如くである。

「サン、シモン説は始めて勞働及び財産の歴史を、人類發達の本質的要素と考へ、而して夫れ

によつて社會史(まだ其の概念は立て、居なかつたが)の研究を教へた。

サン、シモン派は始めて産業的社會の二大階級の區別を言明した(假令夫れによりて下の階級の意識に、危険なる憎惡心を注入したとは云へ)。労働者の階級は自から構成するであらうと云ふサン、シモンの語は、實現された。サン、シモン説はプロレタリアの最初の表現である。

サン、シモン説は更に是れまで國家生活及び自由の最高形態と考へられた純立憲的政治の理論を、其の弱點に於て攻撃し、而して同派の尙ほ不明瞭なる産業的政治論の觀念に於て、社會改良を國家の唯一の眞の任務として論述した。

終りにサン、シモン説は始めて遺産相續權問題を呈出したのであるが、此の問題は實に次の二世代に於ける歐洲の社會形成の全將來が依屬するものである』(千九百二十一年 Dr. Salmon 出版 S. S. 230 u. 231)

次にデードが「經濟思想史」に於て、サン、シモン説に認めた歴史的意義を述べるが、同書は近頃獨逸語にも英語にも譯された好著作である。而して其の第一版は千九百九年に公にされたものであるが、其の中に左の如く述べられて居る。

『吾人はサン、シモン派の教説に於て、第十九世紀の進行中社會主義を特質附ける殆んど總ての批判的及び建設的觀念の胎芽を認めねばならぬ。夫れは第十九世紀の社會主義の序論或は目次で

あると、見做し得られるのである。

先づサン、シモン派の人々に於て、社會主義文献上クラシカルとなれる公式の多數が、見出されることは驚く可きである。『人間によりての人間の使役或は掠奪』(l'exploitation de l'homme par l'homme)と云ふ語は、千八百四十八年までは、非常に流行して居た。而してマールクス後之れに取り代はれる階級闘争と云ふ語は、其の意味に於ては毫も異なつて居ない。又サン、シモン派の人々はルイ、ブランに先だちて『労働の組織』を説き、更にマールクスに先だちて不動産的及び動産的資本を「労働の道具」と稱した。而して吾人はサン、シモン派の人々を、組合社會主義者(les socialistes associationistes)の中には數へないが、しかも彼等は組合アソシヤシヨを生産組織の卓絶せる形態として主張するに於て、何人にも劣らなかつた。尙ほ彼等は社會主義者が、地代の理論に就て爲さざるを得ざりし應用までも豫見した。

今サン、シモン説は第十九世紀の社會主義を構成する感情及び觀念の、最初の最も雄辯な又最も透徹せる表現として、吾人に現はれるので、其事に就ては何人も争ふことは出来ない。』(1<sup>st</sup> Edition de 1909. p. p. 261-265)

却説以上引用せる諸家の見解によりて、サン、シモン及びサン、シモン派の人々の思想が、現代社會思想の發達に對して、如何に重要な意氣を有するかは、大體上推察されると思ふから、



此處には夫れ以上に述べることが省き、是より特に同派の社會連帶思想に就て少しく論述して、以て本論文を完結したいと思ふ。

近代社會連帶思想は、佛國革命の個人主義思想に反抗して起れるものにして、而して根本的には人間は本來完成せるものとして生れ、只生存發達の利益關係からしてのみ相團結し、社會生活を營むものでなく、社會の中に生れ、社會によりて始めて人間として成立し發達し、其の人間としての具體的性質に於ては、本來社會によりて規定されて居るもの、即ち時間的には前諸世代の影響によりて、又空間的には並存的相互依存の關係によりて、規定されて居るものと見る思想である。されば廣義に解する時は、個人主義的社會思想に反對して、人間と人間との本來の團結關係を高調する社會思想は、總て社會連帶説であると云ひ得られるのである。現在の人間は過去の影響によりて、又相互に離す可からざる相互依存の關係によりて、あるが如きものとして存立し發達して居るので、決して過去の對しても亦現在に對しても、絶對的に孤立して居るものではないと考へる思想は、總て廣義の社會連帶思想である。而してかゝる意味にては、社會連帶思想は甚だ古くから行なはれて居るので、決して近代の産物でないことは云ふまでもない。しかも吾人が今日之を近代的思想と見て重要視するは、全く歴史的關係によるのである。即ちルネサンス時代より著しく發達し始め、殊に第十八世紀に至つて、啓蒙思想として思想生活も社會生活政治生活

も、一般的に支配し來り、遂に佛國大革命を産出せる個人主義的、合理主義的或は主觀理性主義的、非歴史的或は反歴史的思想に猛然反抗して起れるものとして、社會連帶思想は殊に佛國に於て重大なる近代思想と見做されるのである。併し同一の傾向は假令佛國に於てほど明白ではないとしても、歐米諸國に通じて一般に存するのであるから、社會連帶思想は一般的に重大なる近代的思想と見做されるのである。

本雜誌に於てさきに公にせる拙稿「傳統派の社會連帶思想」中に述べし如く、佛國大革命後先づ社會連帶思想を盛んに唱道したるは傳統派の哲學者であつた。併し彼等は夫れによりて舊社會組織を復活せしめようとしたのであるから、到底沈く近代人の要求を充たすことが出来なかつた。

そこで社會連帶の思想や權威の思想を彼等から學びつゝ、しかも之を進歩的近代の意味に解釋し、近世の歴史的發達の大勢に基いて社會組織に根本的改造を加へ、新社會組織を建設せんとする人々が現はれたが、先づ第一に現はれたのはサン、シモンであつた。併しサン、シモンの思想はさきに述べし如く、一種の過渡的思想にして、徹底しない點が多かつた。而して之を一層徹底させたものが、即ちサン、シモン派の思想であつた。かくてサン、シモン派はサン、シモンの思想を承けて、更に之を一層徹底させ、社會主義的傾向を甚だ明白に現示し、而して上に引用せる諸家の見解によりて學ばれる如く、近代社會主義の幾多の根本思想の芽を發生させ、而して或意味で

は既に社會主義者と看做し得られるが、しかも彼等は本來ブルジョアの浪漫主義者であつたら、遂に徹底せる社會主義には到達しなかつたのである。彼等は労働者階級の物質的及精神的改善を以て、常に根本的社會問題と考へ、労働者階級の發達を以て社會改造の根本主義と信じて居たが、併し彼等は親しく労働者に接し、よく労働者を理解して居たのではなく、覺醒せるブルジョアとして、人道主義的精神から労働者を見て居たのである。かくて彼等は労働者の解放は労働者自身の覺醒と、労働者自身の努力とによりて成就されるものなるをまだよく覺らず、覺醒せる人道主義的なブルジョアに指導されて、此處に始めて労働者は解放されるものと信じて居た。つまり社會改造は下よりの仕事でなく、上よりの仕事であるを信じて居た。かくて彼等は社會的君主主義さへも唱へるに至つたのである。

尙ほサン、シモン派は労働者の解放と共に、又當然之れと相伴ふて發達するものとして、婦人の解放を唱へたことは注意す可きである。殊に彼等が婦人解放と唱へ出したのは千八百三十年代であることは、大に注意す可きものにして、此の時代にはまだミルの婦人論も現はれて居ず、學者が一般に婦人解放問題には注意して居なかつたのである。其の際にさきに述べし如くに、婦人の解放を益んに唱道し、精神生活に於ても男子と同等に重要な地位を女子に認めたることは、一の卓見と云はねばならぬ。

併し何よりもサン、シモン派の社會思想を特質附けて居るものは、彼等の宗教的思想であつて、彼等は彼等の社會思想を、結局彼等の宗教的思想から引き出して居る、或は之を以て裏附けて居るのである。而して彼等の宗教的哲學思想の根本原理は、さきに述べし處によりて知られる如く、肉の復活即ち靈肉合致の思想と、汎神教的思想とである。

今産業の重要を、根本的に即ち哲學的宗教的に基礎附けんとすれば、自から肉の復活の思想の如きもの、肉體生活を心靈的生活と同等に尊重する思想に到達せねばならないと思はれる。肉體生活か心靈的生活よりも劣れるもの、否な心靈的生活の自由は、肉體的生活の否定によりてのみ得られるものさへも見るに於ては、産業の尊嚴は充分に確立されるを得ない。産業を輕視し或は賤める思想は、結局肉を輕視し賤める思想に基因するものである。かくてサン、シモン派は産業の尊嚴を充分に確立する爲めに、宗教的哲學的に肉の復活の思想に到達したのであると思はれる。要するにサン、シモン派は學問と同様に産業を尊重し、兩者の合致を以て新社會組織の根本原理と認める其の思想を、宗教的哲學的に根本的に基礎附けるには肉の復活、靈肉合致の思想を樹立せねばならぬと考へたので、かくて彼等は社會思想を宗教的哲學的思想に結び附け、又宗教から離れて社會の改造を圖ることは、結局不可能であると信じたのである。此の點に於ては彼等は全然傳統派の思想に一致して居る、否な傳統派の思想を受け入れたのである。併し傳統派

は肉を賤しめ靈のみを偏重する加特利教を奉するに對して、肉の復活、靈肉合致を主張する點に於てサン、シモン説は實質上大に之れと異なつて居る。而して此の差異があらゆる方面に於て、サン、シモン派をして傳統派とは大に異なる、否な全く相反する思想に進ませたのである。

併し肉即ち物質に靈即ち精神と同等の尊嚴を認め、靈に依る肉の征服でなく、靈肉の合致を原理とするに於ては、自から傳來の基督敎的一神敎をすて、汎神敎に到達するに至るであらう。學問と産業との合致或は連帶は、自から肉或は物質と靈或は精神との合致或は連帶に考へ至らしめ、而して靈肉の合致或は連帶は自から汎神敎に考へ至らしめるであらう。サン、シモン派の社會思想は結局汎神敎に達して始めて根本的に基礎附けられ、而して又汎神敎から考察して益々發展されて居るのである。

サン、シモン派の思想を推しつめて考へると、人間の歴史的連帶も亦並存的連帶も、つまりは肉に於ける連帶と、靈に於ける連帶とに歸着し、而して靈と肉との連帶に於て、此處に人間の連帶は完成するのであるが、然るに靈肉の連帶或は合致は、結局汎神敎に於て根本的に基礎附けられることになり、而して社會連帶思想はつまり汎神敎にまで遡り、之れによりて始めて根本的に確立されることになるのである。而して此の主旨は、前節（七）の終りに述べたるアンファンタンの最後の著作「永久生命」に於て、最も明白に論述されて居ると思はれるのである。此處に同書

の要旨を繰り返して述べることは避けるから、讀者は前節を繰り返して閱讀されたい。尙ほ同節に述べし如く、アンフアンタンは基督教の靈魂不滅の教、來世の教は本來人間を利己的個人主義的のものとならしめるので、汎神教によりて始めて人間は社會連帶の精神を徹底的に實現し得るのであると論じて居るが、是れ亦社會連帶思想の宗教的哲學的基礎附けを考究するに當つて、吾人の大に注意す可き點であると思ふ。

今や我國の佛教家が大に社會問題に注意し來り、而して社會問題の解決の佛教的原理の考究に努力せんとする人々も現はれて居るが、余は其等の人々がサン、シモン派の思想を考究するれば啓發される處少なくあるまいと思ふ。而して余が佛國に於ける社會連帶思想の發達を研究する諸論文を、本雜誌に於て引き続きに公にしつゝある際に、本論文に於てサン、シモン派の思想を、特に比較的詳しく説述したる理由は、同派の思想は社會問題を研究する我國の佛教家に對して、種々有益なるヒントを與へるであらうと考へたからである。

サン、シモン派の社會連帶思想を研究するに當つて、少なくとも最も多く吾人の注意を引く點の一は、社會連帶思想と汎神教との關係である。併し社會連帶思想の哲學的宗教的基礎附けは、結局汎神教によらずは、徹底的に成就され得ないものであらうか。是れより更に他の諸家の社會連帶思想を歴史的に考察するに當つて、余は常に此の點に注意して行きたいと思ふ。(完結)。